

井手由之(長太郎)は、「又山茶花を宿くにして」(『冬の日』の「狂句こがらし」の巻の脇に、「たそやとばしるかさの山茶花」野水)と脇を添えている。

「旅人と我名よばれん」には、俳壇における地位も名誉もすべて放下して、単なる旅人と呼ばれる、そういう立場で旅に出たいという強い願望がある。「師走十日余、名こやを出て旧里に入らんとす」の前書を有する「旅寝してみしやうき世の煤はらひ」には、市中(俗)と自身の確かな距離の自覚がある。たまたま目にした歳暮の大掃除に、そういえば今は師走の十三日、煤払いの日だったよ、というこの一句に全く精神的な動揺はない。そして、「餅を夢に折結ふしだの草枕」(東日記・前出)、「くれぐれ餅を木魂のわびね哉」(天和二年歳旦発句牒・前出)と比較すれば、その市中との距離、芭蕉自身の定位のちがいを確認することができよう。「歩行ならば杖つき坂を落馬哉」の一句は、その上で解されてしかるべきであろう。そして、その果てに、『炭俵』に代表される「かるみ」の世界も展望されよう。

「放下著」、この一語を生る課題として生きた芭蕉、その志向の果てになお放下しきれなかったもの、それが「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」であった。言いかえれば、究極の詩人芭蕉・人間芭蕉の実像ということになるう。

注

- (1) 「芭蕉と宗教」(芭蕉の本1『作家の基盤』所収) 269頁。
- (2) 藤吉慈海『禅と浄土教』75頁。
- (3) 今栄蔵『作家研究篇』(人と作品1『松尾芭蕉』所収) 54頁。
- (4) 拙稿「芭蕉と仏教——その禅的行為——」(『解釈と鑑賞』平成5・5)にも。

聞人捨子に秋の風いかに」「みそか月なし千とせの松を抱あらし」「しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮」など、一般に「悲壯激越」の境と評される作物は、こうした背景を考えて解されねばなるまい。また、同じく『野ざらし紀行』の「海くれて鴨のこゑほのかに白し」「水とりや水の僧の杵の音」における、ほの白き鴨の声、お水とりの僧の氷るような木履の音、それを聞き得たのも、その悲壮な生活姿勢があつてこそと解さねばなるまい。

『野ざらし紀行』の末尾の一句、「夏衣いまだ虱をとりつくさず」には、右に述べた試練のはてに到達した一種の満足感が感じられよう。「栖去の弁」でいう「なし得たり」の感慨である。

五

貞享三年、「其角歳旦帳」に収める一句、「幾霜に心ばせをの松かざり」、「心ばせ」と「ばせを」を言い掛け、幾霜雪を経ても変わらぬ緑の松、その心操にあやかり、この年もまた決意を守り抜きたい、というのである。一切の「放下」、それに向つて生きることが「心操」を守り抜くことである。

貞享四年十月二十五日、芭蕉は『笈の小文』の旅に出る。『笈の小文』冒頭文の末尾に、

見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事な

し。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

とある。『二入四行観』に、

智者ハ物ニ任セテ己ニ任セズ、即チ取捨違順ナシ。愚者ハ己ニ任セテ物ニ任セズ、即チ取捨違順有リ。

と見え、『信心銘』には、

至道無難、唯^{けんじやく}撿^{けん}択^{じやく}ヲ嫌フ。但憎愛莫ケレバ、洞然トシテ明白ナリ。

とある。「見る処花にあらず」「おもふ所月にあらず」、それは「己ニ任セテ物ニ任セ」ざるがためである。「夷狄」「鳥獸」にとってそれは不可能である。「造化にしたがひ、造化にかへ」るために、一切の放下が必要であり、その階梯として、反俗・脱俗の姿勢が不可欠なのである。

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我名よばれん初しぐれ

(笈の小文)

月をわび身をわび、拙きをわびて、わぶと答えむとすれど、
問ふ人もなし。なほわびぐて、

侘テすめ月侘斎がなら茶哥

(武蔵曲)

延宝九年秋の句である。これを延宝九年の歳旦吟と、翌天和二年の歳旦吟の間に置いてよめば、その脱俗の苦悩を垣間見ることかできよう。

茅舎ノ感

芭蕉野分して鹽に雨を聞夜哉

(武蔵曲)

深川冬夜ノ感

櫓の声波ヨうつて腸氷ル夜やなみだ

(同)

いずれも天和元年(九月二十九日改元)の句である。「わぶと答えむとすれど、問ふ人もなし。なほわびぐて」という生活の中でこそ得ることができた句境である。句の姿はともかく、鹽にうける雨もりの音に耳を澄まし、腸まで氷るような寒さの中にひとりいる芭蕉、その心をとらえるものに出会うことができたのである。『信心銘』に、

前空ノ転変ハ、皆妄見ニヨル、真ヲ求ムルコトヲ用ヒズ、唯ダスベカラク見ヲヤムベシ。

とあり、『参同契』にも、

事ニ執スルハ元是レ迷、理ニ契フモ亦悟ニ非ズ。

とある。芭蕉に対して、仏頂が『信心銘』や『参同契』の文言をそのまま引いて、さし示したかどうかはわからない。仏頂によって、十分に咀嚼されたかかる「教へ」が、伝えられただろうことは想像するに難くない。そして、それを受けた芭蕉は、理知的に享受することに難はなかっただろう。だが、それをいかに解し納得しても、煩惱具足の人間としての芭蕉の感性を制御しきることはむずかしかった。脱俗への苦悩、放下の苦しみ、それを是としたがゆえに蕉風確立への道は開けていったと考えてよからう。

天和三年五月末と推定される『虚栗』の跋文には、「栗と呼ぶ一書、其味四あり」として、その第一と第二に、

李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る。これに倣而、其句見るに遙にして聞に遠之。

と記している。「李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る」ことによって、「其句見るに遙にして聞に遠之」となることは十分に承知している。だが、「李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る」ことは至難のことである。『野ざらし紀行』の「野ざらしを心に風のしむ身哉」「猿を

とある。道を修行している者の身の上に苦厄が生じ、道がふさがれたとしたら、過去無量劫に渡って「本ヲ棄テ、末ニ従」っていたためだというのである。「九年の春秋、市中に住み侘び」ることになったのは、「本ヲ棄テ、末ニ従」って生きていたからである。一切の放下、それによる貪欲からの解放、蕉風の確立はそれを志向する過程においてのみ可能だったと言ってよからう。また、仏頂が芭蕉に示した救済の道はそういうものだったと言ってよからう。

四

詩人として、「本ヲ棄テ、末ニ従」っていたことの自覚、それは同時に反俗的生活姿勢への傾斜を意味する。芭蕉における談林調（通俗）からの脱却、『莊子』への傾倒、李白や杜甫への憧憬は、その上で考えられなければならないまい。

『東日記』に、

摘けんや茶を風の秋ともしらで

（延宝9）

の一句を見る。「茶摘のあとは木枯が吹いたあのように葉影が見えない。茶摘女はそこまで気づかずに摘んだのか」という意である。実景かどうかの詮索はおいて、自身に強く問う意があると解したい。

『東日記』には、『莊子』の「鳧脚短カシト雖モコレヲ続ゲバ則チ憂

ヒ、鶴脛長シト雖ドモコレヲ断タバ則チ悲シ」「愚者ハ自ラ以ツテ覺ユト為ス」による、「五月雨に鶴の足みじくなれり」「愚にくらく棘をつかむ蜚哉」というような句も見える。

延宝九年の歳旦吟、

餅を夢に折結ふしだの草枕

（東日記）

『蕉影余韻』などに載る真蹟の前書は「元朝、心に感あり」、杉風伝来の真蹟には「思ひ立つ事の有る年」の前書があった（『句選年考』）という。通説は、「新春を迎えても、この草庵では、齒朶を枕に旅寝する気持で、餅を夢みるばかりだ」と解す。翌天和二年の歳旦吟は、

くれぐて餅を木魂のわびね哉

（天和二年歳旦発句牒）

「くれぐて」は、年の暮と日の暮を掛ける。一句は、餅つく音のこだまを聞きながら、ひとりわび寝をするだけだ、の意。

世俗は、新年だ、正月だとあわただしい。ひとり草庵に籠る芭蕉は、遠くの杵音を耳に、静かに孤を守らんとしているのだ。市中との距離を確かに感じながら、それを放下しようとしてと耐えているのだ。「末ヲ棄テ、本ヲ採ル」、そのために不可欠な修行と言ってよからう。

三

こゝかしこかれありきて、橘町といふところに冬ごもりして、睦月、きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢむとすれば、風情胸中にさそひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし、なを放下して^(ほ)栖を去、腰にたゞ百錢をたくはえて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり、風情終に菰をかぶらんとは。

(「栖去の弁」)

『おくのほそ道』の旅、その直前における草庵(第二次芭蕉庵)の譲渡に象徴される芭蕉の放下の姿勢については、古くからたくさん論考がある。右の文章は、『おくのほそ道』の旅のあと、元禄四年十一月に江戸へもどった芭蕉が、翌五年の正月を迎えるに当たって記したものである。「猶ことしのたびは、やつしくてもかぶるべき心がけにて御座候。」(元禄二年、閏正月もしくは二月、推定卓袋あて書簡)と述べ、知己・門人の合力によつた草庵を他人に譲渡し、「腰に百錢をたくはへて、柱杖一鉢に命を」つないだ長途行脚を回想したのであった。

「放下」について、『従容録』に、「一物不将来ノ時如何」という嚴陽尊者の問に、「放下著」(「著」は命令の意的助辞)と答え、さらに「已ニ是レ一物不将来、這ノ什麼ヲカ放下セン」と問われ「慙麼ナラ

バ則チ担取シ去レ」と答えたとある。これは「無一物」ということになさえ執着するなということである。一切を放下することによってのみ自在は成立し、そのことによって対象に集中することが可能となる。『碧巖録』には、「破草鞋^{はそうあひ}」という語があり、『孟子』にも「幣履ヲ棄ツルガ如シ」とある。一切を放下することによってのみ見えるもの、芭蕉にとつて、それは「風雅の誠」にはかならない。

芭蕉が「九年の春秋、市中に住み侘びて、居を深川のほとりに移す。長安は古来名刹の地、空手にして金なきものは行路難し、と言ひけむ人の賢く覚えはべるは、この身の乏きゆえにや」と、深川に隠棲したのは延宝八年の冬のことだった。「九年間の江戸市中生活を通して終に打ち勝つことのできなかつた貧困の現実。生存競争からの敗北。深川に隠棲する頃の芭蕉は明らかに、その貧困と敗北を痛烈に意識していた。」⁽³⁾ 仏頂との出会いはその折だったのである。後日の芭蕉から、その折に芭蕉は自身の窮状を訴え、仏頂は救済の道を示したであろうことは十分に考えうることである。⁽⁴⁾ 『一入四行観』に、

云何報^{いかなるか}免^{おんきよう}行。謂ク修道行ノ人、若シ苦ヲ受ケン時、当ニ自ラ我が往昔ノ無数劫中ヨリ本ヲ棄テ、末ニ従ヒ、諸有ニ流浪シテ多ク冤僧ヲ起シ、違害限リナシ。今犯スコトナシトイヘドモ是レ我が宿殃、悪業ノ果熟、天ニ非ズ、人ノ能ク与ヘラルル所ニ非ズト念言シ、甘心忍受シテ、スベテ冤訴ナカルベシ。

特に重要視されねばならないかは、はなはだ疑問である⁽¹⁾という考え方がないわけではないが、芭蕉における仏の教え、というようなテーマで稿をすすめようとするなら、まず「禅」ないし「臨済禅」をそれを解く鍵として使うのが妥当であろう。

芭蕉年譜を具に見ていくと、彼の禅思想への傾倒、実践は『莊子』の導きによるところが大きく、具体的には『俳諧合』の嵐亭序文、『次韻』の巻頭句などがあげられる。

芭蕉が禅門に参じたのは、深川隠棲後間もないころと推定され、その動機は「一たびは仏籬祖室に入らむとせし」(幻住庵記)、「暫ク学んで愚を暁シ事をおもひ」(笈の小文)などの述懐によって知られる。そして、その師は仏頂禅師であった。仏頂は延宝二年、前任で師の冷山遷化の後、鹿島根本寺二十一世を継いだが、神宮の大宮司に寺領を半減されようとしたので、江戸表へ訴え出た。その間、江戸に滞留すること九年、通説は深川大工町の臨川庵を宿としたと推定する。

仏頂は係争中の延宝六年、下野の雲岸寺(臨済宗妙心寺派)に入り、天和二年訴訟に勝って本知に復したが、これを機に根本寺を退いて、阿玉村の大儀寺を中興、元禄八年再度雲岸寺に入り、正徳五年同寺で遷化している。

この間、芭蕉は貞享四年八月、『鹿島紀行』の旅で仏頂をたずね、その隠居所で一夜をとみにしている。だが、この一夜を含め、両者の間にどのような対話があったか、それは全く不明である。

元禄二年四月五日、芭蕉は『おくのほそ道』の旅で、雲岸寺に仏頂

の山居跡をたずね、後にそれを題材として一章を成した。『無門関』の各則の構成に擬したかと思われるこの一章は、仏頂の「豎横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば」の一首、その記憶をたよりに上山したのだった。そして、芭蕉の「木啄も庵はやぶらず夏木立」は、その「頌」にあたると言ってもよい。

「禅は仏陀の成道と密接に関係し、禅定なくして仏陀の正覚はなく、仏陀の正覚なくして仏教なしとも言えるであろう。」「正覚の仏心が以心伝心といわれるように相伝され、仏心の自覚をもって宗の本旨とする⁽²⁾。」

臨済禅における悟りへの道は、宗祖(義玄)の大悟の体験を各人が自身の身を引きつけて追体験することによって開ける。その媒として、先覚の記録・問答集・座禅の公案などが尊重される。したがって、この宗においては、特定の本尊を立てず(釈迦如来を本尊とするものが多いが、薬師如来・大日如来・観世音菩薩、あるいは達磨大師像・臨済禅師像も安置するし、本尊としてではなく、種々の明王、天・神像なども祀る)、特定の教義や経典を持たないのである。そして、「不立文字」「教外別伝」、すなわち文字による経典とは別に、師家から弟子に向けて語られた悟りの境を伝承していくことが重んじられる。芭蕉が記憶していた仏頂の「豎横の」の一首もまた、その一つであったと考えてよからう。

元禄七年九月、芭蕉は最後の旅の途中にあった。同月二十九日、この夜から下痢が激しく、それは十月一日の朝にまで及んだ。『笈日記』同日の条に、「此夜より泄痢いたはりありて、神無月一日の朝にいたる。しかるを此叟は、よのつね腹の心地悪しかりければ、是もそのまゝにてやみなんと思ひいけるに、二日、三日の比よりやゝつりて、終に此愁とはなしける也。」とあり、『枯尾華』には、「伊賀山の嵐、紙帳にしめり、有ふれし菌ツカビの塊積ツカにさはる也と覚えしかど、苦しげなれば例の薬といふより水あたりして、長月晦の夜より床にたふれ、泄痢、度しげくて物いふ力もなく」とある。十月五日朝、「南の御堂前しづかなる方」へ病床を移し、膳所・大津・尾張などの門人に重態が知らされた。八日、之道は住吉へ参り、師の病氣回復を祈願した。前掲の日記記事は、その夜のできごとを記したものである。

「此深夜におよびて、介抱に侍りける吞舟を」呼び、「旅に病で」の一句を記させた。さらに支考を呼んで「なほかけ廻る夢心」の別案を示し、生死の境にあってのかかる句作について、「是を仏の妄執といましめ給へる。たゞちに今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふは」と悔んだ、という。そして、翌九日「大井川浪に塵なし夏の月」は、園女亭で詠んだ「白菊の目に立てて見る塵もなし」にまぎらわしいと、「清滝や波にちり込青松葉」の改案を示し、「是もなき跡の妄執とおもへば、なしかへ侍る」(『笈日記』)と言ったという。

二

『方丈記』に、

そもそも一期の月影かたぶきて、余算の山の端に近し。たちまちに、三途の闇にむかはんとす。何のわざをかかこたむとする。仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし。

とあり、『おくのほそ道』では、

当国雲岸寺のおくに仏頂和尚山居跡あり。

豎横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して、岩に書付侍りと、いつぞや聞え給ふ。其跡みると、雲岩寺に杖を曳ひば(略)、

と記している。仏頂の一首は、『方丈記』にいう「事にふれて執心なかれとなり」という「仏の教へ」に基づいたものである。

芭蕉と「仏の教へ」について、梅原猛のように、芭蕉は「あらゆる神、あらゆる仏に、無条件に崇拜の態度を示しているように見える」「はたして、芭蕉に影響を与えた多くの思想の中で、禅の影響のみが

放下 著

黄色 瑞 華

一

病中吟

旅に病て夢は枯野をかけ廻る 翁

その後支考をめして、へなをかけ廻る夢心 といふ句つくるあり。いづれをかと申されしに、その五文字は、いかに承り候半と申ば、いとむつかしき事に侍らんと思ひて、此句なにゝかおとり候半と答へける也。いかなる不思議の五文字か侍らん、今はほいなし。みづから申されけるは、はた生死の転変を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやゝ半百に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。是を仏の妄執といましめ給へる、たゞちに今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ

生前の俳諧をわすれむとのみおもふはと、かへすゞくやみ申されし也。さばかりの叟の辞世は、などなかりけると思ふ人も世にあるべし。

〔笈日記〕

もとより心神の散乱なかりければ、不浄をはぐかりて、人々近くも招かれず、折々の詞につかへ侍りける。たゞ壁をへだてゝ、命運を祈る声の耳に入けるにや。心弱きゆめのさめたるはとて、

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

また、枯野を廻るゆめ心、ともせばやと申されしが、是さえ妄執ながら、風雅の上に死ん身の道を切に思ふ也と悔まれし。八日の夜の吟也。

〔枯尾華〕